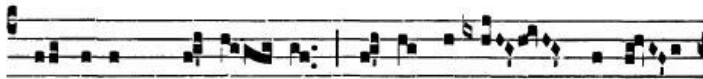


Requiem 死者の為のミサ曲

死者の安息を神に願うカソリック教会のミサ(死者の為のミサ : missa pro defunctis)で用いる聖歌をレクイエムと呼びます。

初期のローマ典礼(Roman Rite, Ritus Romanus)では、Requiem ミサは通常のみサとは異なり、通常のみサの一部が省かれます。例えば、みサの冒頭で、司祭が福音を読み上げる前に唱える審判の詩篇(psalm iudica)、聖餐を受ける前の2人の司祭の祈りの1人目が省かれます。この他にも、入祭文(Introit)と福音等での香の使用、Gloria in excelsis Deo、Credo (信経, Creed)は省かれ、AlleluiaはTractusで置き換え、Agnus Deiは変化します。初期のみサで使われていた“Ite missa est”は“Requiescant in pace”で置き換える等々・・・。

数世紀の間、RequiemはGregoria聖歌の旋律を歌っています。15世紀後半、Johannes Ockeghem (1410/1425 – 1497)が作曲したRequiemが、現存している最古のRequiemです。先輩のGuillaume Du Fay (c.1397 – 1474))の作品があったことは判っていますが、作品は喪失しています。Ockeghemの作品もDu Fayの影響を受けています。

Intr. 6.  **R** Equi-em * aetér- nam dó-na é- is Dómi-

Gregoria聖歌
Requiem入祭唱冒頭

1545年3月15日、教皇パウルス3世 (Paulus III, 1468 – 1549)が開催した、トリエント公会議 (Council of Trent)で典礼で使うテキストを統一するまで、様々なテキストが使われています。1500年頃のBrumelによるRequiemには、初めて“Dies Irae”が使われます。このような初期のRequiem作品は、対位法polyphony音楽を使い、非常に簡潔なコーラル、もしくは、Fauxbourdon*のような音楽と合わせて使い、音楽の感触を際立って対比させています。

ミサとミサ曲/Requiemの構成

固有文 Proprium	通常文 Ordinarium 通常みサ	レクイエム
Introitus (入祭唱) Requiem aeternam	Kyrie (主よ憐れみ給え) Gloria(神に栄光あれ)	Requiem
Graduale (昇階唱) Alleluia / Tractus (詠唱) Sequentia (続唱) Dies irae (怒りの日) Tuba mirum (不思議なラッパの響き) Rex tremendae (恐るべき御稜威の王よ) Recordare (思い出し給え) Confutatis (呪われし者) Lacrymosa (涙の日)	Dies iraeから Lacrymosaまで 一つのテキストです	省略 (省略) (省略) Mozart の例 区切り方
Offertorium (奉献唱)	Credo (信仰宣言, 使徒信条)	省略
Communio (聖体拝領唱)	Sanctus (三聖頌) / Benedictus (祝福せよ) Agnus Dei (神の小羊) Ite Missa Est (みサの終了)	

*Fauxbourdon : 中世末期からRenaissance初期、英国のJohn Dunstaple (c. 1390 – 1453)がブルゴーニュ楽派に伝えた、3度和音をFauxbourdonと呼びます。誤った低音 : false droneという言葉です。当時の音楽で、3度音程を協和音とは認識していないことを現しています。転じて、3度の和声を使ったHomophony音楽を指す言葉になっています。

Requiem 死者の為のミサ曲

Sequentia (続唱) 最後の審判を歌います。

Sequentiaのテキストは、Dies Iræから Lacrymosaの最後のAmen まででひとつの典礼文です。

MozartのRequiem		VerdiのRequiem	FaureのRequiem
Dies irae	(怒りの日)	○	×
Tuba mirum	(不思議なラッパの響き)	○*	×
Rex tremendae	(恐るべき御稜威の王よ)	○	×
Recordare	(思い出し給え)	○*	×
Confutatis	(呪われし者)	○	×
Lacrymosa	(涙の日)	○	△*

次のように、3行詩で行末に韻律を持っています。

I. Dies iræ , dies illa, Solvat sæclum in favilla: Teste David cum Sibylla.		XI. Iuste Iudex ultionis, Donum fac remissionis Ante diem rationis.
II. Quantus tremor est futurus, Quando Iudex est venturus, Cuncta stricte discussurus!	<i>Mozartと Verdiの 区切り</i>	XII. Ingemisco , tamquam reus: Culpa rubet vultus meus: Supplicanti parce, Deus.
III. Tuba, mirum spargens sonum Per sepulchra regionum, Coget omnes ante thronum.	<i>Mozart, Verdi Tuba mirum</i>	XIII. Qui Mariam absolvisti, Et latronem exaudisti, Mihi quoque spem dedisti.
IV. Mors stupebit, et natura, Cum resurget creatura, Iudicanti responsura.	<i>Verdi の区切り</i>	XIV. Preces meæ non sunt dignæ: Sed tu bonus fac benigne, Ne perenni cremer igne.
V. Liber scriptus proferetur, In quo totum continetur, Unde mundus iudicetur.	<i>Verdi Liber scriptus</i>	XV. Inter oves locum præsta, Et ab hædis me sequestra, Statuens in parte dextra.
VI. Iudex ergo cum sedebit, Quidquid latet, apparebit: Nil inultum remanebit.		XVI. Confutatis maledictis, Flammis acribus addictis, Voca me cum benedictis.
VII. Quid sum miser tunc dicturus? Quem patronum rogaturus, Cum vix iustus sit securus?	<i>Verdi Quid sum miser</i>	XVII. Oro supplex et acclinis, Cor contritum quasi cinis: Gere curam mei finis.
VIII. Rex tremendæ maiestatis, Qui salvandos salvas gratis, Salva me, fons pietatis.	<i>Mozart, Verdi Rex tremendæ</i>	XVIII. Lacrymosa dies illa, Qua resurget ex favilla Iudicandus homo reus: Huic ergo parce, Deus:
IX. Recordare , Iesu pie, Quod sum causa tuæ viæ: Ne me perdas illa die.	<i>Mozart, Verdi Recordare</i>	XIX. Pie Iesu Domine, Dona eis requiem. Amen.
X. Quærens me, sedisti lassus: Redemisti Crucem passus: Tantus labor non sit cassus.		

Requiem 死者の為のミサ曲

Sequentia (続唱)

Sequentiaは、中世後期からルネッサンス初期に、アレルヤ唱に続いてミサを説明するような役割を持ち始めます。ルネッサンス中期頃には多くの作品が作られています。

トリエント公会議で典礼文を統一化する際、公認された4つの続唱でRequiemの為のテキストがこの“Dies irae”です。“Dies irae”(怒りの日)は、Francisco会のイタリアの修道士、チェラーノ(Celano)のThomas (Tommaso da Celano; c.1185 – c.1265)、もしくは、Dominico会、サンタ・サビーナ聖堂(Basilica Sanctae Sabinae)の読師、Latino Malabranca Orsini (d.1294)によるテキストとされています。この続唱は遅くとも13世紀から使われています。更に古い時代のグレゴリウス1世 (Gregorius I, c.540 – 604)やBernardus Claraevallensis (1090 – 1153)、神学者Bonaventure (1221–1274)に由来する可能性もあります。

中世ラテン語のテキストは、前ページのように3行毎の韻律を持ち、神の王座での最後の審判を扱います。テキストをどのように音楽にするかは、MozartとVerdiの例の通り様々です。また、Gregoria聖歌の“怒りの日”の旋律は、Berliozなど多くの作曲家が引用しています。最後の部分、“Pie Jesu”も個別に多く使われています。

Responsorium (赦祷文)の扱い

ミサの終了後の赦祷式(しゃとうしき, Absolutio ad Tumbam)で歌われます。ミサが終わった後ですが、葬儀に使うため、曲がつけられることがあります。Faure, Verdiは曲を付けています。“Libera me”と呼びます。

“Libera me”(われを解き放ちたまえ)は、カソリック教会で死者の為の祈りで歌われる応唱(responsorium)です。そして死者の罪の赦し(ゆるし)は、Requiemミサの直後に、棺の傍で埋葬の前に語られる死者の為の祈りです。テキストは、神に故人の最後の審判での慈悲を請います。

ローマ・カソリック教会での典礼書Roman GradualにあるGregorian聖歌に加えて、多くの作曲家がテキストに音楽を付けています。Anton Bruckner (2曲), Giuseppe Verdi, Gabriel Fauré, Maurice Duruflé, Igor Stravinsky, Benjamin Britten, Krzysztof Penderecki, Antonio Salieri 等

Responsoriumは先唱者が一人で先唱し、合唱が応唱します。先唱のテキストは

Libera me, Domine, de morte aeterna, in die illa tremenda

解き放ち給え、神よ、かの怯える日の永久の死より

と始まり、合唱は死者の為のテキストを応唱します。

In Paradisum (楽園へ)の扱い

出棺、埋葬時に使われます。ミサとは別ですが、Gabriel FauréやMaurice Durufléが曲を用意しています。

“In paradisum”(楽園へ)は、西方教会のレクイエムで使われる伝統的な羅語の典礼にあるAntiphona(交唱)です。棺が教会から出るときに、合唱が歌います。

テキストは

In paradisum deducant te Angeli;
in tuo adventu suscipiant te martyres,
et perducant te in civitatem sanctam Jerusalem.

天使が貴方を楽園に導くであろう
貴方の到着に殉教者が出迎え
そして聖都エルサレムに貴方を導く

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

謎のレクイエムの依頼

1791年、Mozartはシカネーダから受けた歌芝居 (Singspiel) “魔笛” K. 620の作曲をほぼ終え、プラハのボヘミア王、皇帝レオポルト2世の戴冠式で上演するOpera seria “皇帝ティートの慈悲” K. 621の注文を7月末に受け、優先して作曲します。完成の目処が立ち、8月末にプラハへ出発する直前、見知らぬ男性がMozartを訪ね、匿名の依頼主からのレクイエムの作曲を依頼し、高額な報酬の一部を前払いして帰ります。

9月中旬、Mozartはプラハから戻り“魔笛”の残りを書き上げ、9月30日の初演に間に合わせています。そしてレクイエムの作曲に取りかかります。この頃からMozartは体調を崩し、11月後半には床を離れられず、12月には悪化し、12月5日の未明、享年35歳で亡くなります。彼の葬儀は12月6日に聖Stephan大聖堂の十字架チャペル (Kreuz-Kapelle)で行われ、4日後の10日、シカネーダの勧めで、Hofburg宮殿の前にある皇帝用の聖ミハエル教会でのミサで「レクイエムの初演」がそれまで完成した形(第2曲以下の合唱を斉唱)で行われます。

Mozartの死後「Mozartは死の世界からの使者の依頼で自らのためにレクイエムを作曲していたのだ」という伝説が流布します。当時、依頼者が公でなく、ダ・ポンテに宛てとされる書簡で、Mozartは死を身近に感じているかを語り、使者に催促されて自分自身のためにレクイエムを作曲しているとされています。1964年、匿名の依頼者はFranz von Walsegg伯爵というGloggnitz近くの領主であること、そして、使者は伯爵の知人Franz Anton Leitgebという人物であると明らかになります。ヴァルゼック伯爵は1791年2月に若くして亡くなった妻の追悼のためにレクイエムを依頼したと真相が明らかになります。

Costanzeの妹Sophie Weber*は、Mozartが最後までベッドで弟子のジュスマイヤ(Franz Xaver Süßmayr)にレクイエムについての作曲指示をし、臨終はまだ口でレクイエムのティンパニの音を現そうとするかの様だったと姉Aloysia Weber等に宛てた手紙に書いています。手書き譜面から、オーケストラ編成まで完成していたのはIntroitまでです。そして、詳細な下書きを残していたのはKyrieとSequenzaのDies irae、最初の8小節までのLacrymosaとOffertoriumです。
*Constanzeは旧姓Weberで4人姉妹、Carl Maria von Weber (1786 – 1826)の従姉

未完の名曲

Costanzeは作曲報酬を先払いで受け取っている為、この遺作を完成させる必要があります。

アイブラーの補筆

最初にMozartと親しいPiano奏者で作曲家のアイブラー (Joseph Eybler, 1765 – 1845)に完成を依頼しています。1791年12月21日付けの書留でMozartの残したスコアを送っています。アイブラーは、Mozart自筆のスコアに直接自分の補筆を書き込んでいます。補筆はSequentiaのConfutatisだけに留まり、Offertoriumには着手していません。Lacrimosaも、ソプラノに2小節を追加しているだけで、スコアはCostanzeに戻しています。



Joseph Leopold Eybler

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

ジュスマイヤ版

Süßmayrは、最初に、アイブラーの書き込んだ補筆を除いて、Mozart自筆のスコアを再現し写しを作ります。従って、アイブラーによる補筆をそのまま採用していませんが、参考にしています。書き付けの冊子や覚え書きが無くなっているため、Süßmayrの加筆による拡張部分が不明確のままです。Süßmayrは、後にSanctusとBenedictus, Agnus DeiはMozart自身によるものである(指示や書き付けによる)としていますが、これも不明です。同じく弟子であった、Franz Jakob Freystädtlerも参加しています。

Süßmayrによって完成したスコアにはMozartの署名に似せた署名と1792年の日付が残っています。5月の初旬に完成させたようです。



Franz Xaver Süßmayr

伝統版 (Traditionellen Gestalt)

現在まで多く演奏されている版は、Süßmayrの手により完成されたものを、Anton Brucknerの校訂で知られる、Leopold Nowak (1904 – 1991)が校訂した伝統版です。明らかにSüßmayrの手による音楽とMozart自身による音楽には、演奏者から見て差がありますので、多くの批判を受けることになり、多くの校訂版、補作が出ています。

しかし、校訂版が出版されるに従い、Süßmayrの加筆自体の功績は再評価されます。やはり、Süßmayrの功績は大きく、他に方法を求めるにしても、Süßmayr版を認めた上での訂正版が多くなっています。

主な補筆版

バイヤー版 (Franz Beyer, 1922 – 2018)

Weingarten (Württemberg領邦)出身のViola奏者ですが、音楽作品の校訂者として良く知られています。1971年にMozartのレクイエムの新校訂版を出版し、知られるようになります。Süßmayr版を基本として、Mozartの音楽様式から外れている箇所を校訂し、広く認知されています。2005年に新たな補作バイヤー版を出版しています。

モルダー版 (Richard Maunder, 1937 – 2018)

英国の音楽学者・数学者で、曲自体は未完として、Süßmayrの補作を削除し、Mozartの他の楽曲(魔笛, 皇帝ティートの慈悲, 他)を参考に補筆しています。

ランドン版 (Howard Chandler Robbins Landon, 1926 – 2009)

米国の音楽学者ランドンは、アイブラーの補筆したConfutatisを採用しています。Lacrimosa以降はSüßmayrの補作を用いて、Landon自身も一部に加筆しています。「Mozartの作品を完成させるには、20世紀の学者より同時代のEybler, Franz Jakob Freystädtler (1761 – 1841), Süßmayrの方が適している」として、Süßmayrを再評価しています。

レヴィン版 (Robert David Levin, 1947 –)

米国の作曲家レヴィンは、Süßmayr版に管弦楽法の扱いを書き換えています。Lacrimosaに“Amen Fuga”を挿入し、独自の補作をしています。当時の転調の慣例を考慮しています。Sanctus, Benedictus, Osannaを拡大しています。これは、Süßmayr版の弱点を補っているように思います。

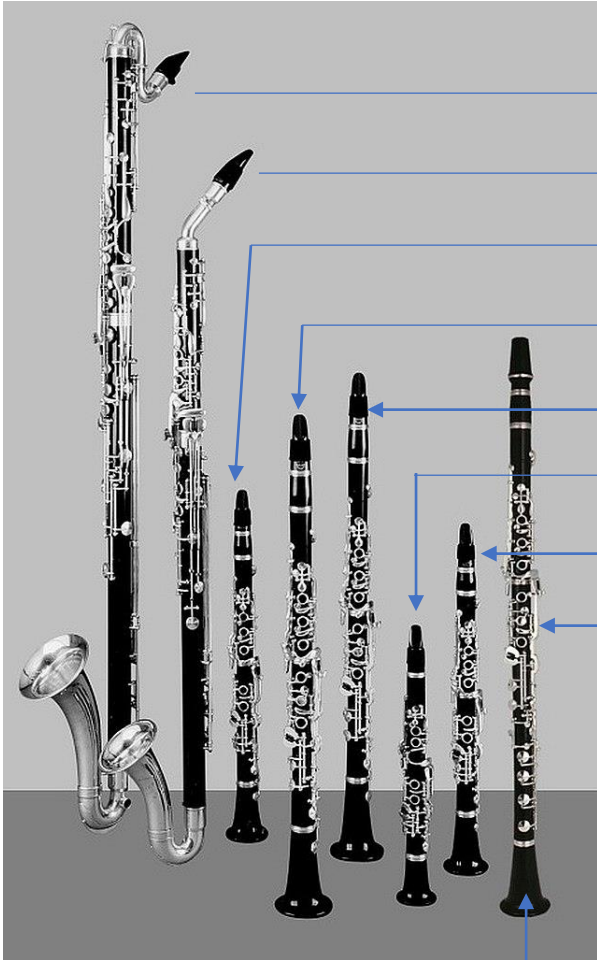
Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

Corno di bassetto

Mozartのレクイエムには、**バセットホルン**が使われています。

バセットホルン(伊 : Corno di bassetto, 独 : Bassethorn)は、通常のクラリネットより、やや低い音域のクラリネット属の楽器です。楽器分類からは古楽器とされていますが、現在のオーケストラで通常に使われるバス・クラリネットも含め一連の楽器群を構成しています。

クラリネット楽器群



Clarinetto basso in B

B管バス・クラリネット

Corno di bassetto

F管バセット・ホルン

Clarinetto in D

D管クラリネット 高音域

Clarinetto in B

B管クラリネット 通常管

Clarinetto in A

A管クラリネット 通常管

Clarinetto piccolo in G

G管クラリネット 高音域

Clarinetto piccolo in Es

Es管クラリネット 高音域

Clarinetto di bassetto in A

A管バセット・クラリネット

この他にも管調性の異なる管があります。
コントラバスクラリネット等

バセット・ホルンは1760年代に、PassauのAnton MayrhoferとMichael Mayrhofer兄弟によって開発されたとされています。この時代の楽器には、真鍮製のベルが付いています。

イングリッシュ・ホルン同様、ホルンという名前が付いていますが、金管楽器ではありません。木管楽器です。名前のBassettoは、バス(basso)+小さな(etto)；少し低音という意味になります。



Anton, Michael Mayrhofer兄弟によるBassetthorn (1760年代)

Mozartのクラリネット協奏曲 A-Dur KV 622は、元々はG管のバセット・ホルンを意図して用意された作品 (KV. 584b/621b)です。この曲を作るときのクラリネット奏者、Anton Paul Stadler (1753 – 1812) がこの楽器も名手だったからです。便宜的に通常のクラリネット用の作品として広がり、当時のクラリネットの向上にも寄与します。ただ、作品を通じて通常のクラリネットより、バセット・クラリネットの音域に相応しく作られています。

最近、A管のBassetto clarinettoを使っている録音が出ています。ex) Sabine Meyer

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

I. Introitus (入祭唱)

Requiem aeternam (主よ、彼らに永遠の安息を与え給え)

RequiemのMotiv (D - Cis - D - E - F)は全曲に出てきます。

D C# D E F D C# D E F : Requiem motiv 安息の動機

Requiem aeternam dona eis, Domine,	主よ、彼らに永遠の安息を与え給え
et lux perpetua luceat eis.	そして、彼らに絶えない光が照らしますように
Te decet hymnus, Deus, in Sion,	神よ、あなたはシオンにおいて賛美されます
et tibi reddetur votum in Jerusalem.	そしてエルサレムであなたに誓いが捧げられる
Exaudi orationem meam	私の祈りを聞き入れ給え
ad te omnis caro veniet.	皆の肉体が、主の元に戻ることが出来ますように

II. Kyrie eléison (主よ憐れみ給え) 二重フーガ

三位一体を象徴して、神とキリストと聖霊に憐れみを請います。3行。
 テキストはギリシア正教からの引用で、ギリシャ語をラテン語綴りにしています。
 Kyrie eleison. Christe eleison. Kyrie eleison. 主よ憐れみ給え、キリストよ憐れみ給え

III. Sequentia (続唱)

1. Dies irae (怒りの日)

Dies irae, dies illa, solvet saeculum in favilla	その日は怒りの日、世は灰となる
teste David cum Sibylla.	ダヴィデとシビラが証言したように
Quantus tremor est futurus,	どれほど震えるのだろうか
quando iudex est venturus,	裁く者が現れる時、
cuncta stricte discussurus.	全てが厳しく裁かれる

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

2. Tuba mirum (不思議なラッパの響き)

Tenore trombone

Bass solo

Tu - ba mirum spargens so - num,

Tenore tromboneのsolo obbligatoに導かれて、最後の審判について、劇的なテキストをBasso, Tenore, Alto, Sopranoと引き継ぎながら歌います。4重唱に至って審判の意味を語ります。

Basso : Tuba mirum spargens sonum
per sepulchra regionum
coget omnes ante thronum.

不思議なラッパの音が響き
各地の墓から
全てが玉座の前に集められる

Tenore : Mors stupebit et natura
cum resurget creatura
judicanti responsura.

死と生は驚く、
創造物の人々が蘇ることに
裁く者に応えるために

Liber scriptus proferetur
in quo totum continetur
unde mundus judicetur.

書き記された物を差し出し、
そこには、全てが書き記され、
そして、世の全てが裁かれる

Alto : Judex ergo cum sedebit
quidquid latet, apparebit.
Nil inultum remanebit.

審判者がその座に着く時、
隠されていた全ては明らかになる
免れる者は居ません

Soprano : Quid sum miser tunc dicturus?
Quem patronum rogaturus?

哀れな私は何を語るのでしょうか？
誰に弁護を頼むのでしょうか？

Quartetto : Cum vix justus sit securus.

ただ正しいことだけが、救いとなる

3. Rex tremendae (恐るべき偉大な王よ) 神よ、我に慈悲を与え給え

Violino 1

Soprano

Alto

Tenore

Basso

[Violoncello,]
Basso ed Organo

Tutti Rex,

Tutti Rex,

Tutti Rex,

Tutti Rex,

Solo Tutti

6 6 6

Rex tremendæ majestatis,
qui salvandos salvas gratis,
salva me, fons pietatis.

恐るべき偉大なる王よ
救われる者を、救い給う
我を救い給え、慈悲の泉よ

祈りの、salva meから、音楽は激しさが消え、緩やかに曲を終わります。

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

4. Recordare (思い出し給え)

緩やかで滑らかな旋律を使っています。

独唱の4重唱は、長いテキストの内容に沿って、相互に追いかけるよう(Polyphony的)に、また、一緒(Homophony的)に、変化して歌います。テキストの劇的な展開に沿って、音楽は控え目な変化で、効果的に表情を変えています。

Recordare Jesu pie,
quod sum causa tuae viae,
ne me perdas illa die.

思い出し給え、慈悲のイエス
我らの為にあなたがお出でになったことを
その日に、我を滅ぼさぬように

Quaerens me, sedisti lassus.
Redemisti crucem passus.
Tantus labor non sit cassus.

我を探し、あなたは疲れ、座り込まれた
罪をあがない、十字架に苦しまれた
このような辛苦を無駄とされませぬように

Juste judex ultionis,
donum fac remissionis
ante diem rationis.

応報の正しき審判者よ
最後の審判の日の前に
ゆるしの恵みを与え給え

Ingemisco, tamquam reus
culpa rubet vultus meus.
Supplicanti parce Deus.

罪人のように嘆き
罪は私の顔を赤らめます
神よ、哀願する者に慈悲を与え給え

Qui Mariam absolvisti,
et latronem exaudisti,
mihi quoque spem dedisti

(マグダラの)マリアをゆるし
そして、盗賊(マタイ)の願いを聞き入れ
私に希望を与えられた

Preces meæ non sunt dignae.
Sed tu bonus fac benigne
Ne perenni cremer igne.

私の祈りは価値のないものです
されど、慈悲をもって好意を成し給え
永遠の炎に焼かれぬように

Inter oves locum praesta,
et ab haedis me sequestra,
statuens in parte dextra

羊の群れの中に置き
そして、私を山羊から離し
あなたの右側においてください

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

5. Confutatis (呪われし者)

Recordareとは対称的に、男声による箇所の激しい表情と、女声による箇所の柔らかい表情は大きく変化させ、後半の混声では不安感を漂わせた表情となっています。

男声：	Confutatis maledictis flammis acribus addictis,	呪われし者、口を塞がれし者 火による厳しき判決が下される
女声：	voca me cum benedictis	祝福されし者と共に、私を呼び給え
混声：	Oro supplex et acclinis cor contritum quasi cinis gere curam mei finis	ひざまづき、平伏して願います 心は灰のように砕かれています 私の終わりの時に守り給え

柔らかな和音(F-Dur)で終わり、明るい和音(D-Dur)を聴かせ、次の短調を強調します。

6. Lacrymosa (涙の日) 嘆きのMotivを支配的に使っています。

混声：	Lacrimosa dies illa, qua resurget ex favilla, Judicandus homo reus; Huic ergo parce Deus.	その日は涙あふれ 燃える灰から蘇り 裁きを受ける罪人は 神よ、その者をゆるし給え
-----	--	---

Pie Jesu Domine, dona eis requiem. Amen	慈悲のイエスよ、主よ 彼らに安息を与え給え、 アーメン
---	-----------------------------------

Sequentia (続唱)の最後に、1962年にWolfgang Plathが発見したAmen fugueが構想にあったとする説もあります。

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

IV. Offertorium (奉献唱)

1. Domine Jesu (主、イエス・キリストよ)

Soprano
Do - mi - ne Je - su Chri - ste, Rex glo - ri - ae, Rex glo - ri - ae,

Alto
Do - mi - ne Je - su Chri - ste, Rex glo - ri - ae, Rex glo - ri - ae,

Tenore
Do - mi - ne Je - su Chri - ste, Rex glo - ri - ae, Rex glo - ri - ae,

Basso
Do - mi - ne Je - su Chri - ste, Rex glo - ri - ae, Rex glo - ri - ae,

*[Violoncello,]
Basso [ed Organo]*
p f

Domine Jesu は、弦楽器群を技巧的に使い、テキストに従い表情を変えて行きます。

Domine, Jesu Christ, Rex gloriae,
libera animas omnium fidelium defunctorum
de poenis inferni et de profundo lacu.

Libera eas de ore leonis,
ne absorbeat eas tartarus,
ne cadant in obscurum.

Sed signifer sanctus Michael
repraesentet eas in lucem sanctam.

▶ Quam olim Abrahae promisisti et semini ejus.

主よ、キリストよ、栄光の王よ
全ての死せる信者の心を救い給え
地獄の罰と底ない深淵より

彼らを獅子の口から救い給え
深い闇が彼らを飲み込まぬように
闇の底に落ちるのではなく

そうではなく、旗手聖ミカエルが
彼らを聖なる光に導くように

かつて、アブラハムと子孫に約束されたように

2. Hostias (捧げ物、生贄) *Hostias(生贄)は、聖別されたパン、キリストの身体を指します。

[Violino I]

[Violino II]

[Viola]

Soprano
Tutti
Ho - sti - as et pre - ces ti - bi Do - mi - ne, ti - bi Do - mi - ne

Alto
Tutti
Ho - sti - as et pre - ces ti - bi Do - mi - ne, ti - bi Do - mi - ne

Tenore
Tutti
Ho - sti - as et pre - ces ti - bi Do - mi - ne, ti - bi Do - mi - ne

Basso
Tutti
Ho - sti - as et pre - ces ti - bi Do - mi - ne, ti - bi Do - mi - ne

*[Violoncello,]
Basso ed Organo*
Solo Tutti

Hostias et preces, tibi, Domine, laudis, offerimus,
tu suscipe pro animabus illis.

Quarum hodie memoriam facimus.

Fac eas, Domine, de morte transire ad vitam.

▶ Quam olim Abrahae promisisti et semini ejus

主よ、生贄と祈りをあなたに讃え捧げます
彼らの魂を受け入れ給え

我らが今日思い出す人たちは

死を生へと転じさせ給え

かつて、アブラハムと子孫に約束されたように

Offertorium の2曲の最後にある同じテキストの行に、同じ音楽を使っています。

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

V. Sanctus (三聖頌/三聖唱)

Adagio

Timpani

Violini

Chor

Basso continuo

f San - - ctus san - - ctus san - - ctus

SanctusはRequiemの中で明るい調性(D-Dur)を使い短く、Hosannaに入ります。

Sanctus, Sanctus, Sanctus.	聖なるかな(3回 : 三聖頌)
Dominus Deus Sabaoth.	万軍の主、神よ
Pleni sunt coeli et terra gloria tua.	あなたの栄光で天と地は満ちる
Hosanna (Osanna) in excelsis.	高きところにホザンナ(神を讃えよ*)

Hosanna : *元々は「我を救い給え」という言葉から変化しています。

VI. Benedictus (祝福せよ)

Soprano solo

Alto solo

Solo

Be - ne - dictus qui ve - nit in no - mi - ne Do - mi - ni.

Benedictusは4人のSoloが掛け合いながら美しく、表情豊かにアンサンブルします。

Benedictus qui venit in nomine Domini.	主の御名により来る方は祝福されます
Hosanna (Osanna) in excelsis.	高きところにホザンナ(神を讃えよ)

VII. Agnus Dei (神の小羊)

Violini

Chor

Basso continuo

mf p mf p mf p mf p

A - gnus de - - i qui

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi.	世の罪を除きたもう神の子羊よ
Dona eis requiem sempiternam.	彼らに永遠の安息を与え給え

伴奏の音型を使い、Agnus Deiの行と Dona eisの行の表情を効果的に変えています。神の小羊は、イエス・キリストのことを指し、人間の罪をあがなうために、イエスが生贄となるという、古代ユダヤ教の生贄の習慣に由来する表現です。

Wolfgang Amadeus Mozart : Requiem in d-Moll, KV. 626

VIII. Communio (聖体拝領唱)

Lux aeterna (永遠の光を)

入祭唱(Requiem ~ Kyrie)と同じ音楽を使い、同じく **Soprano solo**が歌い始めます。

Lux aeterna luceat eis, Domine.

Cum sanctis tuis in aeternum quia pius es.

Requiem aeternam dona eis, Domine,

et lux perpetua luceat eis.

主よ、彼らを永遠に光で照らし給え

あなたの聖人と永遠に、あなたの慈悲により

主よ、彼らに永遠の安息を与え給え

そして、彼らに絶えない光が照らしますように

独唱	Marita Solberg, soprano	ノルウェイ出身	ノルウェイ、ドイツ他欧州
	Karine Deshayes, mezzo-soprano	フランス出身	フランスの劇場を中心
	Joseph Kaiser, ténor	カナダ出身	NYメトオペラや映画
	Alexander Vinogradov, basse	ロシア出身	欧州各地のオペラ
合唱	Chœur de Radio France	フランス放送合唱団	
	Nicolas Fink, chef de chœur		
管弦楽	Orchestre National de France	フランス国立管弦楽団	
指揮	James Gaffigan		

日付 2017年6月29日

場所 Saint-Denis大聖堂 Saint-Denis音楽祭

譜面 伝統版



James Gaffigan (1979)



Marita Solberg(1976)



Karine Deshayes(1972) デエ



Joseph Kaiser(1977)



Alexander Vinogradov(1976)

James Gaffigan (1979 -) : 米国New York市出身、New England音楽院、Shepherd音楽学校(Rice大学)を卒業、ドイツFrankfurtで開催される、Sir Georg Solti記念国際指揮者競技会(Sir Georg Solti International Conductors' Competition)で優勝します。以降、米国、欧州で活動中です。

Cleveland Orchestra, San Francisco Symphony, Lucerne Symphony Orchestra, オランダ放送フィルハーモニー管弦楽団 (Radio Filharmonisch Orkest (RFO)), KölnのGürzenich Orchestra, ノルウェイのTrondheim Symphony Orchestra, スペインのValenciaのPalau de les Arts Reina Sofía、Komische Oper Berlin 等